

《ポーランドの歴史とマズルカ》

クラシック音楽が最も豊かで実りのあった 19 世紀のポーランドは、ポーランド立憲王国、ポズナン大公国、クラクフ共和国に分割され、不自由で不安定な状態が続いていた。この分割前にはワルシャワ公国 (1807-1813) というナポレオン・ボナパルトが作った国が存在し、フレデリック・ショパンはこのワルシャワ公国時代に生まれた (1810 年生まれ) 事になる。アドルフ・ローエンの著名な絵画「ネマン川上のいかだで会見するナポレオンとアレクサンドル 1 世」はいわゆるティルジット講和条約 (1807 年) の様子を描いたものであるが、この条約によって、ポーランドはプロイセン王国から脱却した。そのため、ポーランド人はワルシャワ公国を作ったナポレオンに大きな期待を寄せていた。ショパンはワルシャワ公国のジェラゾヴァ・ヴォラで生まれ、およそ 7 ヶ月間をその地で過ごした。ジェラゾヴァ・ヴォラはマゾフシェ県ソハチェフ郡の村で、ワルシャワから車で 1 時間の場所にある。ジェラゾヴァ・ヴォラには一度消失したショパンの生家が復元され、その家でコンサートが開催されたりとイベントが頻繁に行われている。その為、ワルシャワからのエクスカージョンで行ける有名な観光スポットとなっている。生家には広大な庭園があり、長閑な風景が広がっている。ショパンの他にもヴァイオリニストのヘンリク・シェリング (1918 年 - 1988 年) が同地で出生している。1810 年の 10 月にワルシャワに引っ越したショパン一家だったが、3 歳の時にワルシャワはポーランド立憲王国の一部となり、ロシアの支配下となった。この出来事はショパンの人生を狂わす大きな事件であった。その後もショパン生存中に国の体制が変わる事はなく、ショパンは最期までロシアのパスポートを所持していた。ポーランド生まれであるショパンにとって、それは当然ながら嬉しい事ではなかった。1837 年、パリで生活をしているショパンへ「ロシアの宮廷ピアニストの称号」への招待が届く。しかし、ショパンはこの申し入れを拒否し、「私は 1830 年の 11 月蜂起に参加しなかったが、心はポーランド蜂起に参戦した人たちと共にあったため、称号は受け取ることはできません」と返事をした。1830 年に祖国ポーランドを離れた後、亡くなるまで一度も帰郷出来なかったのはこの出来事が関係していると考えられる。1830 年に 2 曲目のピアノ協奏曲を書き上げた 20 歳のショパンは、ワルシャワからウィーンへ赴く途中に立ち寄ったシュトゥットガルトで、11 月蜂起失敗の知らせを受け、錯乱した様子で「神様！あなたはロシア人なのか？」という言葉を書き綴った。ポーランドとロシアの関係はショパンの音楽人生にも深い爪痕を残した訳だ。ショパンの音楽を語る上でポーランドの民族音楽である「マズルカ」の重要性は計り知れない。ショパンにとっての「マズルカ」は、当時存在しない国 (ポーランド) の音楽なのであり、曲を残さなければ文化が永遠に失われるかもしれないという使命感によって書かれた音楽である。「自国の民族音楽を芸術作品に融合しよう」という考えで生まれた音楽ではないのだ。

マズルカはポーランドの民族舞踊を元にした音楽作品であるため、実際には「マズルカ」という舞踊は存在しない。マズルカはマゾフシェ地方の「マズール」を代表とした呼び名で、マズールが主軸となった「メドレー」のような存在であると考えて差し支えない。よって音楽作品マズルカにはマズール以外の踊りも含まれていて、クヤヴィ地方の「クヤヴィヤク」、速い旋回を意味する「オベレク」がある。現ポーランド国歌は「ドンブロフスキのマズレク」"Mazurek Dąbrowskiego" で、「マズール」のリズムが使われた国歌である。ヤン・ヘンリク・ドンブロフスキは 1755 年に生まれ、ナポレオン戦争中のイタリア・ポーランド軍団を率いた人物で、ポーランドでは英雄と呼ばれた。この「ドンブロフスキのマズレク」は 1797 年に作曲され、軍人で親友のユゼフ・ヴィビツキが詩を書き、この歌は 1797 年 7 月 16~19 日にイタリアのレッジョ・ネレミアの町 (現エミリア = ロマーニャ州) で作られ、7 月 20 日に初演された。作曲者は不詳。歌詞は以下のようなものである。

ポーランドは未だ滅びず、
我らが生きるかぎり。
同盟軍が我らから取り上げたものを、
私達はサーベルで取り戻す。

進め、進め、ドンブロフスキ、
イタリアからポーランドまで
あなたの指揮下で
我らは再び国民となる。

我らはヴィスワ川とヴァルタ川を渡り
ポーランド人とならん。
ボナパルトは我らに例を与える
いかにして勝つかの

チャルニェツキはポズナンへと戻った
スウェーデンの占領の後に、
我らの祖国を救うために
我らもまた海を渡り帰って来る。

ある父は、涙して、
彼の娘バーシアに言う
「聞くがよい、我らが息子たちは
タラバン軍鼓を打ち鳴らしている」

出だしの「ポーランドは未だ滅びず」という言葉が印象的だ。存続の危機にあったポーランドであったからこそ、荘厳で勇ましい歌詞と曲調は多くのポーランド人の共感呼び、彼らの魂を揺さぶった。「マズール」と聞くと、先ずこの曲が思い浮かぶポーランド人は多いであろう。恐らくショパンも例外ではなかったはずだ。ショパンがマズールのリズムを使う時には必ずと言って良いほど勇ましい音楽を書く理由はここにあるのかもしれない。1927年にはポーランド国歌として採用され、現在に至る。

マズールについてももう少し詳しく説明を加えるが、マズールの起源は16世紀に遡り、貴族「シュラフタ」の間で踊られていた。「シュラフタ」は14世紀ごろポーランドで騎士階級から派生した特権的身分である(出典 小学館 日本大百科全書)。マズールは弦楽器群を主軸とし、ドゥディと呼ばれるポーランドのバグパイプ、打楽器などが用いられる。

基本ステップはランニングステップ、サイドウェイステップ、スライディングステップ、男性がアクロバティックに飛び上がるホウブツァがある。

譜例 カロル・クルピンスキ :マズール



譜例 マリア・アガタ・シマノフスカ マズール

《ピアニストから見たヴィエニャフスキ》

ヴィエニャフスキはポーランド立憲王国内のルブリンで生まれた。ヴィエニャフスキはポーランドで非常に重要な人物であり、ポーランド第3の都市ポズナンにあるポズナン国際空港は別名でヘンリク・ヴィエニャフスキ国際空港と名付けられているほどだ。また、そのポズナンではヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールが開催されており、ヴィエニャフスキがポーランドにとって無くてはならない存在である事が窺えよう。現在のクラシック音楽界においてヴィエニャフスキの立ち位置は、イザイやサラサーテの少し前の時代に活躍した、“ヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ”としてのみ知られている。ヴィエニャフスキの作品は華麗で演奏効果も高い作品が多く、ヴァイオリンリサイタルの「花形」として扱われる事が多い。しかし今回のリサイタルではヴィエニャフスキの作品群が主役であり、ヴィエニャフスキが如何様に西洋音楽に向き合い、また純粋に作曲家としてどれほどの功績を果たしたかについて知ることとなるであろう。

マズルカは元来「ポーランドの民謡に伴奏を付け加えた音楽」であり、ポーランド人にとって馴染みのある民謡 (Koło mego ogródeczka など) が使用された。伴奏にはポーランドの民族楽器が用いられた。ポーランドには数種類のバグパイプがあり、ドゥディ、コジョウ、ガイディ、コプザなどが知られている。スコットランドのバグパイプとは異なる構造と音色を持ち、ドローン管を持つポーランドのバグパイプは伴奏に適した楽器であった。弦楽器はスカ等を用いた。スカはフィドルの一種で、大抵の場合4弦を持つ楽器である。このスカのオリジナル楽器は現存しないため、書籍のイラストから復刻が為されたりしている。打楽器分野ではブルチバスなどが使用された。ブルチバスは2人で演奏する楽器で、1人が樽状のボディをホールドし、もう1人は本体に通した馬の毛を引っ張り、ブルブルと振動させて音を出す。これは大変ユニークな楽器で、ポーランド固有の楽器と言って良いだろう。結果的にマズルカの演奏では、旋律を担当する人と伴奏者がはっきり分かれる事となり、すっきりと澄んだ音色が特徴となっていった。19世紀のピアノ音楽に置き換えられたマズルカにもその一面が役立ち、性格的小品の中に上手く溶け込んでいった。19世紀初頭にはポーランド人によってマズルカが数多く作曲されたのだが、その草分けとなったのがショパンの師であるヨゼフ・エルスナーと言われている。エルスナーはスタニスワフ・モニュシュコ、ショパンを育てた師として知られているが、マズルカをピアノ作品として出版した最初のポーランド人でもあったようだ。19世紀初めにはカロル・クルピンスキ、マリア・シマノフスカらがマズルカを作曲して出版したことで、ヨーロッパにマズルカが急速に知れ渡った。シマノフスカはコンサートピアニストとして各地で演奏活動を行った人物で、マズルカの普及に多大な貢献をしている。なかでも「24のマズルカ、またはポーランド民謡」は大掛かりな作品群で、ショパンも恐らくその音楽を知っていたであろう。19世紀のマズルカは曲名に「マズール」や「クヤヴィヤク」、「オベレク」など、踊りの種類を表記しているケースが多いのだが、現代の我々から見ると、その曲名が必ずしも音楽内容に相応しているとは限らない。特に「オベレク」に関する楽曲は、ほとんど内容はマズールと同一であったりするため、未だに混乱が生じている。曲名はさておき、クルピンスキ、エルスナー、シマノフスカのマズルカは、いずれの作品も個性に溢れ、また同時にポーランドの栄光と苦難の歴史が音に刻まれているようにすら感じる。

話は戻るが、ヴィエニャフスキのマズルカには次のような曲名が付けられている。

作品 12 第 1 曲「牧歌」 第 2 曲「ポーランドの歌」

作品 19 第 1 曲「オベルタス」 第 2 曲「ドゥディアルツ (バグパイプ)」 (吟遊詩人のマズルカ)

これらの副題からも想像出来るように、ポーランドの民謡を題材にしつつ、マズルカの二次創造物として楽曲を制作したと考えられる。「牧歌」、「ポーランドの歌」は曲の雰囲気伝えるための漠然とした命名で、外国向けに自国文化を紹介する時に使う言葉のようにも見える。この曲名の中で“踊り”の種類を示唆しているのは作品 19-1「オベルタス」のみである。「オベルタス」は「オベレク」と同義であり、速いテンポでメロディラインがシンプルであるという特徴を有している。しかしながら、この曲はリズムの面でオベルタスらしい特徴をあまり持っていない。少し強引に関連付けるとするならば冒頭 8 小節間の箇所のみがオベルタスであり、その後の展開は一貫してマズールのリズムで作られている。前述したように、このような不一致現象は頻繁にある事なので、なんら不自然ではない。作曲者のなんらかの気分が「オベルタス」なのであり、オベルタスのリズムやアクセントの特徴を取り入れようとはしなかったようだ。マズルカ 作品 12 の第 1 曲「牧歌」の冒頭は本当に美しい。空虚 5 度 (第 3 音を含まない和音) がバスドローンによって鳴り続け、その上をテナードローンが鳴り、特徴的な付点メロディがバグパイプのチャンターによって奏でられる——そんな風景が鮮やかに表現されていて、標

高の高い丘で演奏したらさぞかし似合うだろうと思わせるような音楽だ。第2部の「マルチアーレ」からはヴィエニャフスキお得意の「マズール」である。山岳地帯の音楽という先入観を持ちつつ第2部「マルチアーレ」を聴くことになる為、ヨーデルのような広い音域の旋律が際立ち、チロリアンの音楽を聴いたような印象を受けるだろう。マズルカ作品19の第2曲もポーランドのバグパイプを題材にした作品だが、劇場音楽寄りにデフォルメされており、オペラやバレエの一場面を思わせる作品だ。

ヴィエニャフスキのマズルカは、民謡の特徴を全面に押し出さない所が楽しい。ポーランドの民謡を遠目から観察し、ある一種の余裕を持って作曲したように感じる。ヴァイオリンらしい奏法がマズルカの語法に瑞々しい響きを加える。ある意味では楽曲としてのマズルカのあるべき姿を打ち出したとも言えるし、ヴァイオリン・ヴィルトゥオーゾのベールを纏ったマズルカなのかもしれない。ヴィエニャフスキも他のポーランド人作曲家と同様にマズルカを西洋(クラシック)音楽基準で作り上げた事は疑いようがないであろう。

《舞踊作曲家としてのショパン》

ショパンは1824,1825年の夏にポーランドのクヤヴィ地方のシャファルニャに滞在し、その地で民族舞踊に触れて、その文化を学んだ。ショパンはこの時14、15歳であり、その体験が後々のマズルカ生成に役立っていたようだ。若きショパンは各舞踊を正確に把握した上で、そのメロディ、リズムの音楽的特徴を素早く吸収していった。ショパンが最初に書いたマズルカは1825年に書かれた2つのマズルカB.16で、ちょうどシャファルニャ滞在時期に当たる。この最初期のマズルカでは様々な舞曲が混ぜ合わされているため、後年のマズルカとは傾向が少し異なっていると言えよう。

ところで、ショパンは自作のマズルカに踊りの種類を書き入れた事は一度もなく、全て「マズルカ」という表記で統一していた。

言うまでもなくショパンは、ポーランド人で最も成功した作曲家であり、知名度の面でヴィエニャフスキとは雲泥の差がある事は認めなくてはならないだろう。しかし知名度は時に人を盲目にする。一部の優れた作曲家の作品だけが持つ「根拠のない説得力」によって、聴衆に限らず演奏者さえも惑わされる事が少なくない。それはダ・ヴィンチの絵画に時代感を感じないのと似ているかもしれない。ある人はそれを「普遍性」と呼ぶかもしれないが、そのような謂わば神格化された思想においては、視野は自ずと狭くなり、無条件の信仰を促してしまう可能性があると考えなくてはならない。ショパンもその知名度によって真価が見失われ続けてきた作曲家の一人であった。

ショパンのイメージは、そのハーモニーの巧みさ、ピアノの音響面におけるの改革、親しみやすい旋律が主たる所だろうか。シューマンはショパンの事を「花に隠された大砲」と言い、その美しさのヴェールに隠れた情熱を批評したりもした。それらは全て、ショパンの音楽の一面を正しく示している。これらのイメージを紹介する事で「ショパンがショパンらしくなる為に」演奏家たちは音楽的偏見を操りながら演奏している。さらに作曲家の神格化は人格面にまで侵食し、芸術作品に見合った人格を勝手に探り出そうとしてしまう。例えば、手記に残された出来事は、ある突発的に起きた事件であったからこそ「こんなことがあったよ」と書いたものではなく、それら記述を組み合わせたら正しい人物像が浮かび上がるなどという事は決してあり得ない。氷山の一角を見ただけで判断せず、我々はまだ多くの情報を知らねばならない。その情報は多ければ多いほど真実に近づくと思われる。そこで私は「ショパンはポーランド民族音楽を忠実に楽譜に書き残した」という説を立てたいと思う。

今まで音楽学者や教師達は、この説に辿りつくことを恐れて、必死に抵抗を施してきた。その理由は、「ショパンの音楽は国際的であり、洗練されている」、「ショパンのワルツとマズルカは別物だ」という訳だ。ショパンはマズルカを芸術作品にまで質を高めたので、ショパンのマズルカは、マズルカを使ったショパン独自の言語であると言われ続けてきた。神格化されたショパンの曲はどれも「ショパン」という作品に他ならず、「何かに属すことは出来ない」とされてきた。それはまるで水上に浮かぶ神秘的な城に惹かれる観光客と似ている。崇高で孤高な作曲家像に人々は強い魅力を感じるわけだ。しかしその考え方では、ショパンの音楽の源流を一つ失う事となるだろう。それは「ショパンは舞踊作品の大家であった」という事実である。私の説の根拠は下記のようなものである。

① ショパンは1810年～1830年の間、ウィーン、ベルリンへの演奏旅行を除きほとんどポーランド国内で生活をしてきた。出生後から二十歳までを過ごしたその地の音楽を体内から全て排除するのは不可能である。私も学校で花笠音頭や祭りの歌を聞き、また踊らされて育ったものだ。最近はその類の音楽を聴いてはいないが、

音楽は容易に思い出す事が出来て、またメロディも覚えている。

- ② ショパンによる民謡採取のスケッチは見つかっていないが、いつでも五線紙を持って出かけた訳ではないだろうし、頭の良い人であればメロディや伴奏楽器の音を覚えておく事が出来る。そしてそれらは半永久的に覚えておく事が出来るものである。また、民謡を楽譜に書き留めたメモが存在した可能性も捨てきれない。
- ③ ポーランド民謡は世界有数の質の高い音楽であり、旋律やフレージングも含めて大変美しい。ポーランド人の教養の高さが顕著に現れており、その旋律はショパンのものと酷似している。
- ④ 「わたしは根っからのマゾビヤ人（ポーランドの地方で、マズルカを生んだとされる地域）だから、これということもなく、新しいマズルカを書くことができた」とショパンは語った。
- ⑤ 私の体験談であるが、マズルカ作品 41-1 をポーランドでリハーサルをしている際、ご年配の女性がこの曲の歌詞を知っていると言い、メロディを歌詞付きで口ずさんでいた。曲名は分からなかったが、原曲は存在する可能性が高い。
- ⑥ マズルカ作品 24-1 の原曲は「村の住人が死んだ」という内容の曲である。メジャーとマイナーを行き来しながら歌われる。
- ⑦ ポーランド民謡はペルシャの音階が使われることがあり、マズルカ作品 17-4 でもその影響が随所で見られる。
- ⑧ ポーランド民謡の主題による幻想曲 作品 13 では、「ラウラとフィロン」の歌曲が主題として使われている。
- ⑨ スケルツォ第 1 番の中間部には、ポーランドのクリスマスキャロル *lulajze jezuniu* が使われている。
- ⑩ ショパンは自作のポーランド語の歌曲を書いたが、その音楽が民謡との繋がりを示している。

確かにショパンのマズルカを聴くと洗練の極みにある事は疑いようがない。しかし、ショパンだったから洗練されたマズルカを書けたのではない。また、同時代の作曲家達のマズルカと比較しても、原曲を尊重したいという意思が強く感じられる。この私の説はマズルカを理解する上ではあまり重要な意味を持たないかもしれないが、他の作品を知る際に意味が発生してくる。例えばショパンが作曲した「ワルツ」の中にショパンらしさがあると感じるのは誤りで、本当はワルツの中にマズルカらしさがあると気付けるようになるはずだ。少なくともショパンはオーストリア発祥のワルツを大変嫌っており、シュトラウスのワルツは音楽として認めていなかったほどだ。そんな彼がいくつものワルツを作曲したのは何故だろうか。有名な「子犬のワルツ」はオペレクスタイルであり、華麗なる大円舞曲 作品 18 はマズールである。だからこそショパンのワルツは速いテンポの音楽なのであり、ワルツとして踊る事は絶対に不可能な速さを持つ楽曲が誕生したのだ。そうとなると「華麗なる大円舞曲」という、いささか大袈裟な副題は明らかにショパンのジョークなのだ。ワルツだと思って踊り出した人達が急にアクロバティックなポーランド舞踊を踊らされてアタフタ。。それを影で笑っているショパンの姿が見えてくるではないか。